ウェスレーの聖霊の神学

——東日本大震災以降の今日的意義について

久保哲哉

はじめに

現在、世界中で様々な「行き詰まり」が叫ばれている。希望に溢れるに違いないと思われた二十一世紀社会はアメリカ同時多発テロ事件によって幕を開けた。経済においては進歩主義を前提とする資本主義経済の限界が明らかとなり、コンプライアンスを遵守すべき大企業において利益確保のための虚偽や偽装による不祥事が横行し、貧しい者がより貧しくされ、富める者の富が増大していく時代を迎えている。人々の生活の領域では、地域社会や各家庭においても人間関係の崩壊が叫ばれ、子どもたちの貧困や自尊感情の低さが課題とされている。そのような中で起こったのが東日本大震災である。マックス・ヴェーバーの「鋼鉄のように堅い檻[1]」という言葉が現代の「行き詰まり」を的確に表現しているといえよう[2]。物質的には最も豊かな時代といえる日本社会の中で様々な「行き詰まり」を感じながら生活している者は多いのではないだろうか。換言すれば、心の底から湧き上がるような「喜び」や「幸福」を人生に求めながら、その方法を見出すことができないでいる者が多いのではないだろうか。

本論文の目的は一八世紀英国を聖霊による平和と喜びを源泉として神の愛と隣人愛に生き抜いたジョン・ウェスレー（John Wesley, 1703–1791）の神学を考察し、その原動力となった「聖霊の働き」を明らかにすることで、現代社会を覆っている「行き詰まり」の打開に一筋の希望をもたらすことである。「聖霊の働き」は信じる者に、神の子としての喜びと、幸福に生きるための新しい生命力の創造をもたらすものである。冒頭で挙げたヴェーバーはウェスレーの聖霊の教理は救いについて「晴れ晴れとした確信を与えることになる」[3]と評価しているところだが、私見では日本におけるプロテスタント神学の主たるものは三位一体なる神の第二の位格「キリスト」の十字架と復活の出来事に重点が置かれ、第三の位格である「聖霊」について論じられることが少なかったように思われる。よく愛唱聖句として挙げられる「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」（ローマ五・三以下）や「いつも喜んでいなさい」（Ⅰテサロニケ五・一六以下）についても、直後に聖霊及び〝霊〟の火についての言及があることをどれだけのキリスト者が認識しているだろうか。

筆者は現代を覆っている「行き詰まり」の原因の最も根本的な部分は、人間の心に平和と喜びをもたらす「まことの宗教」（ウェスレー）が失われつつあることに起因すると考える。ここでいう「まことの宗教」とは、「主イエス・キリストの十字架と復活」に現された「神の愛」が「聖霊の働き」によって人々の心に「清潔と幸福」をもたらすところのキリスト教を意味する。キリスト者一人ひとりが三位一体の神から愛をいただき、ウェスレーの語る「まことの宗教」（ウェスレー）に生きることが「鋼鉄のように堅い檻」を打ち破る原動力となることを信じ、ウェスレーの聖霊の神学について以下に考察する。

一　アルダスゲートにおける回心前のウェスレー

ウェスレーについて考察するにあたり、まずはアルダスゲート（ロンドン郊外の町。ウェスレーが福音的回心の体験をした場所）における回心前後のウェスレーについて紹介したい。それは彼の神学が「体験の神学」と呼ばれ、これを理解するためには、彼自身が生きた福音的な回心体験を知ることが有益なためである。

ウェスレーは一七三五年十月から召天の二週間前である一七九一年二月二三日まで日記を記しているが、その当初の目的はジョージア宣教の報告のためであった。[4] その最初期の日記には英国を離れてジョージアで宣教する目的について「ただ私たちの魂を救うこと、神の栄光に生き抜くこと」[5]と記されている。このことからウェスレーにとっては伝道の成功が救いに至るために必要不可欠な要素であったことがわかる。しかし、実際の宣教の現場で起こった様々な試練によって、ウェスレーが思い描いていた「伝道」という自らの業（わざ）によって救いへと至る道は閉ざされることとなった。

まず第一にウェスレーの信仰の確信を揺さぶったのは、ジョージアに至るまでに船上で体験した死への恐怖であった。ウェスレーは約四か月の船旅の間に船が粉砕されんばかりの悪天候に見舞われたが、その度に信仰の友と励ましあい、祈りあうことで救いの確信に留まろうと努力した様子が当時の日記に記されている。[6] だが、そうした人間の側の努力によって得る平安は一時的なものであって、決して永続的なものではなかった。ウェスレーは船が嵐に襲われる度に揺れ動く信仰の状態について「汝、信仰なきは何ぞ？」と自身の心が「高慢と、憤りと、報復と（中略）恐怖の悪霊からも救われているかどうか」を自問し続けている。[7]

こうした葛藤に悩まされながらもジョージアにたどり着いたウェスレーであったが、オックスフォードのインテリたちに対する高教会主義をそのまま伝道地に持ち込んだことや、自身の恋愛をめぐったトラブルによって法廷に引き出されたことが原因となり、人々から様々な誤解を受け、夜逃げ同然でジョージアから帰国することとなった[8]。帰国への航路での日記には「私が地の果てに行って学んだことはこれである。自分は神の栄光から堕落したものだ。自分の全心は腐れて忌まわしいものだから、全生活も腐れて忌まわしい」と記されている[9]。こうして二年四か月もの間従事したジョージア宣教の総括は「他の人々を回心させるために渡米した私自身が、神に向かって回心していなかったのだ」との自身に向けた厳しい言葉と「聖霊によって心に注がれた神の愛」への渇望にて締めくくられることとなったのである[10]。そこには後年のウェスレーらしい「明朗快活さ」は見られない。その原因は「私は、御霊と自分の霊とのあかしを持たず、また持つこともできなかった。何故なら、それを信仰によって求めないで、律法の行いによって求めたからだった」との告白に現れている[11]。このように、回心前のウェスレーは祈祷や断食を聖霊によって「幸福に浸る」手段と考え、自身が信仰の確信を持つことができないときに、これを取り戻すための手段としていた[12]。ここで彼が用いている「浸る」という言葉からは救いの喜びによって満たされたいという強い思いを読み取ることができる。しかし、たとえ自らの行いによって一時的には心に喜びと幸福が握られ、罪と戦う力が与えられたとしても、その力は長く続くことはないことに、ウェスレーは行き詰まりを感じていたのであろう。この当時の彼の心は「[まことの]宗教に没入する」ができなかったという激しい後悔によって占められている[13]。

二　アルダスゲート体験によって手にした「まことの宗教」

それではウェスレーが生涯を通して求め、アルダスゲートにおける回心によって与えられた「まことの宗教」とはどのような宗教なのであろうか。彼は説教「神の国への道」において「まことの宗教」とは「心の宗教」であることに言及し、その「すべての実態は『義と平和と聖霊による喜び』から成っている」と宣言している。[14] つまり「まことの宗教」に生きる者はその心に「聖霊による喜び」を宿す者のことであり、この喜びを知り、神の国へ入るために人間は聖書を開くのである。そのため、ウェスレーはその説教集への序文において、彼が聖書を開く目的は「天への道を見出す」ことと表現した。[15] ここでいう「天」とは説教「神の国への道」によれば「聖めと幸福がたましいの中を神が支配しておられる」ことであり「すべての疑い、すべての苦痛に満ちた不安を追放する平和」が聖霊の働きによってキリスト者の「たましいの中に開かれている」状態を指している。この聖霊によって与えられる神の平和が「我らの精神をたかめ、かつ我らの心を快活明朗にするところの神の愛と隣人愛」を生じさせるのである。[16] この聖霊によって与えられる新しい生命力を原動力として実現する聖なる生活、つまり神を愛し、隣人を自分のように愛する幸福の道を歩むことがウェスレーにとっての「天への道」であり「まことの宗教」なのであった。彼が本当の意味で「〔まことの〕宗教に没入」し、「幸いに浸る」ためには、自らの行いではなく、信仰による救いの確証をもたらす聖霊の介入が必要であったのである。

ジョージア宣教から帰国した直後のウェスレーはこの「まことの宗教」が自身の手に握られていないことに絶望していたが、モラビア派の指導者ペーター・ベーラーより「聖潔と幸福とは活ける信仰の果実である」ことを知ら

され、聖霊の働きによって瞬間的にこの「活ける信仰」が与えられることを受け入れた[17]。このようにして準備が整えられたのがアルダスゲートにおける回心の出来事であった。その当日の日誌にウェスレーは次のように記している。

「夕刻、私はひどく気が進まなかったけれども、オルダアスゲイト街における集まりに行ったところ、そこで或る人が、ルタアのローマ人への手紙の序文を読んでいた。九時十五分前ごろ、キリストを信じる信仰によって神が人心に働いて起こしたもう変化について、彼が述べていた時、私は自分の心があやしくも熱くなるのを覚えた。そしてキリストを、只ひとりの救い主であるキリストを信じた、と感じた。また彼は、私の罪を、私の罪をさえも取り去り給うて、私を罪と死との律法から救って下さったとの確証が、私に与えられた[18]」。

これは、ウェスレー自身の信仰的な行き詰まりが主なる神の介入によって解決を与えられた瞬間である。その後もたびたび誘惑に襲われ、自身の信仰の弱さに苦悩することとなるが、その苦悩はそれまでの苦悩とは明らかに質を異にしていた。彼は救いの確証が与えられた前後の違いについて、それまでは罪と極力戦いながらも「時として、征服されていたのに、現在は常勝軍の状態になっている[19]」と日記に記し、説教においては「あなたがたの中にある力・知恵・強さによるのではなく、ただすべての人の中にあってすべての働きを行われる聖霊の恵みによって救われるのです[20]」と語っている。この出来事によってそれまでウェスレーが自分自身の行為によって義と認められ得ると誤認していた救いの順序がついに逆転し、ルターが再発見した福音主義的な信仰義認への回心を体験し、これまで彼が望んできた「まことの宗教」を生き始めるためのスタートを切ったのである。そしてまさに「まことの宗教」

に「没入」するかのようにウェスレーは回心の後、伝道と実践の旅に出ることとなる。

三　真の宗教に「没入する」ということ

ウェスレーは「真の宗教」に生きる者は、神の愛によって救われた結果、隣人を愛するという実践に生きる者とされなければならないとの確信から「社会的交わりなしでは、すなわち人々と共に生き、共に交わることなしには、キリスト教は健全な形では存在することができないだけでなく、存在そのものが不可能になる」[21]とした。その言葉の通り、ウェスレーは様々な地方で野外説教を行いながら、彼の下に集まった献金を用いて積極的に彼らを取り巻く社会問題に対して信仰による解決を試みた。彼は聖霊の導くままに御言葉の実践としての社会運動に身を投じ、密輸、不正選挙、失業に対する政府の政策、物資の不足を告発し、奴隷制度廃止のキャンペーンを支持し、貧困者のための就労施設や学校や医療施設を作り、孤児院を開き、自分の家を年老いた寡婦のために解放した[22]。ウェスレーがジョージアから帰国して以来の説教の数は推定五万二千四百回、伝道の旅の全行程は推定四〇万キロメートル以上と推定される[23]。ウェスレーはその説教において「キリスト教は、本質的に交わり（social）の宗教であり、それを孤立した（solitary）宗教に代えることはそれを破壊することに他ならない」[24]とし「この宗教の本質的な要素のいくつかは、この世との交わりなしには、何の役割も果たさない」[25]と語っているが、彼は自身が手にした「富」を有効に利用することで様々な社会問題を解決していくことを「まことの宗教」に「没入」する方法と考えていたのである。

四　聖霊と富のかかわりについて

ウェスレーは生涯の間、メソジストの宣教者の派遣については金銭の工面で相当に苦労した様子であるが、御心であれば、必要なものは神から与えられることを確信していた。あるとき、集会所の必要に迫られて建築の計画を立てた当時、不思議な仕方で助け手が与えられ、土地の取得に成功し、たった一六ポンドしか手元になかったにも関わらず七〇〇ポンド以上の費用がかかる建築を成し遂げることができた。[26] また、三三〇名以上の貧しい人々が目の前に現れたときには、寄付と集会とによって約二〇〇ポンドを得ることができ、必要な着物を与えることができた。[27] このウェスレーの富に対する姿勢は生涯変わることなく、すべてを伝道のために、また貧しい人々のために使い果たしたため、彼の死後には机の引き出しと彼の洋服の中にわずかな金銭が残っているだけであったとされる。[28] その富に対する態度は徹底しており、野外礼拝の会衆の中に金持ちや地位の高い者があったときには喜びをもって「富について」「金銭の用法」「金銭の使い方」を説教のテーマとし、富める者が裁かれずに神の国に入るためには全財産をささげることを求めていたようである。[29]

このウェスレーの富に対する態度を解明するために、一つの出来事を取り上げたい。彼の日記によれば信徒の遺言によってウェスレーが一千ポンドの大金を手にしたとの風評が立ったとき、ある女性から金銭を無心されたことがあったという。なお、一七六五年頃のロンドンの労働者の賃金は、手に職をもった熟練者で、一日十二時間、週六日間働いて一ポンド程であったとされている。[30] この金の要求に対してウェスレーは次のように答えた。

〝貴女は、金はいつまでもわたしのてもとに留まっていない、ということを考えていませんね。私はなるべく速やかに手元から金を出してしまうのです。それは、私の心に金が食い込まないためです[31]〟。

この「心に金が食い込まないため」という表現は非常に興味深い。ウェスレーは「まことの宗教」を「心の宗教」とし、聖霊の働きによって「聖潔と幸福」の道を進むことを目指してきたが、富は人間の心を堕落させ、幸福をほとんどもたらさないことに確信を持っていた[32]。おそらく、富の内に聖霊の働きをないがしろにする悪魔的な力を認めていたのであろう。彼は説教「富について」において、富は「神の愛」「隣人を己のごとく愛すること」「真の謙遜」「柔和」「忍耐」を妨げるものであり、信仰者を「無神論」及び「偶像礼拝」へ移行させ、「霊魂を死なせ」「神とすべてのまことの宗教に対して死なせる」とすら語り[33]、説教「金銭の危険」においては富を持ち、富を愛する者に対して「金があなたの心を鬼にしてしまったのだ[34]」とも警告している。

だが、ウェスレーは単に富を嫌い、これを避けたのではない。彼は説教「金銭の危険」において、「不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる」（ルカ一六・九）との聖句を根拠として「正直な勤労によってできるだけ儲けよ」「できるだけ貯えよ」「できるだけ与えよ」との三原則[35]を打ち出し、富自体は不義に属するものであるが、神の子らの手の中にあるときには神の栄光を現すために有用なものとなることを示している。事実、彼は自身の言葉の通りに、多くの貧しい者たちのためにささげ尽くすことを通して神を愛し、「聖潔と幸福」の生涯を走り抜いたのである。なおウェスレーの基準においては「自分と家族のために十分なだけの食物と衣服以上のものを持っている人は富める人である[36]」。現代人は自分の心が鬼になってしまっていないかをよく吟味する必要があるだろう。

五　「富の解毒剤」――「神の父性愛のしるし」としての「苦難」

それではウェスレーの基準によれば「富める人」とされるであろう現代人は、自らの心が鬼になっていないかどうかを、どのように吟味すればよいのであろうか。ウェスレーは主なる神が愛する者にしばしば送る「苦難や疾病や大きな十字架」を「富の解毒剤」として認識していた[37]。また、苦難は人間の心に愛を回復させるために、神が人間に送る大切な手段であると考えていたのであろう。ウェスレーはローマの信徒への手紙五章三節の注解において「艱難を神の怒りのしるしとは決して思わず、それどころかこれは、さらに高い幸福を受けるためにわたしたちを準備させてくれる、神の父性愛のしるしであるとして受けるのである[38]」と記している。こうしてウェスレーは人生に必ず起こる苦難を「父性愛のしるし」と解釈するのである。母性的な愛は人間を包み込み、平安や安心を与えるものであるが、父性的な愛は試練において人間を建て上げる。神は真実であるが故に、試練（父性的な愛としての苦難）と共に、それに耐えられるよう、逃れる道（母性的な愛としての神の愛）を備えておられる方である。「聖霊の働き」は信じる者に神の愛を届けることで、神の子としての喜びに生きるための新しい生命力をもたらし「父性愛のしるし」としての苦難を乗り込え、まことの幸いに至る原動力をもたらすのである。

六　現代におけるウェスレーの意義　「行き詰まり」を打ち破るための一考察

それでは結論として、現代の「行き詰まり」を打ち破るために、聖霊の働きがどのような意義をもつのか考察し

ていこう。例えば、少女の自立をテーマの一つとして様々なヒット作を手掛けた宮崎駿は、現在の子どもたちの「行き詰まり」の状況について『始められない』ことと分析している[39]。おそらくこの分析は若者が親元を離れ、自分の物語を始めていくためには多くのエネルギーを必要とするが、現代の青年層からそうした力が失われた結果、本来自立すべき年齢に達しても将来に向かって歩みだすことができないとの指摘であろう。

臨床心理学的には何事においても一つの事柄を成すためには、「父性的なもの（しつけや訓練）」に先駆けて「母性的なもの」が必要であるとされる[40]。これは人間は父性的な苦難の中で勇気をもって生きるためには、先んじて母性的な愛を心に注がれることで力を蓄えなければ、苦難に耐えることができない存在であるとの主張であろう。もちろん、母親が父性的なものを、父親が母性的なものを、あるいは友人がその両方を発揮して隣人を支えることがあるに違いない。またある専門家によればこの「母性的なもの」の本質は「一体化（身体を寄せて心を安定させること）」であるという[41]。確かに人間は老若男女、年齢を問わず、実際に身体を寄せる方法と、言葉によって心を寄せる方法で心の平安を得ることができる存在である。こうして実際に愛されていることを実感し、大切にされる体験が忍耐を生み、苦難の多い人生を歩み抜く原動力が与えられるということは、多くの者が実際の経験から肯定的に受け入れる事実であろう。

しかし、ここに一つの疑問が浮かぶ。それは人間がその生涯を健全に生きるためには、どれだけの愛が注がれる必要があるだろうかという点である。時間的にも空間的にも限界がある存在同士で互いに愛し合うだけでは人間が健全に生きるために必要な「母性的なもの」、すなわち「愛」が決定的に足りないのである。

この点について宮崎が現代の中高生に漫画・アニメ・映画・小説が異常なまでに流行している原因・背景を憂いつつ、テレビ・ゲームなども含めたサブカルチャー群について「満たされぬ部分・失われたものへの『代用品[42]』」

と位置づけていることは非常に興味深い。これは、物語の登場人物等に自己投影（一体化）することで、実生活で「満たされぬ部分」を覆うという仕方で心の安定を求めることが若者の間で流行しているとの分析であろう。残念なことに代用品はあくまで代用品であって本物ではない。一時的に満たされぬ部分を埋めてくれるような感覚を得ることはできるが、人生に真実の勢いを与えるものでは決してない。もちろん、様々な娯楽やレジャーなどを完全に否定するわけではないが、キリスト教的な表現をとれば第一に頼るべきものを見失ったときにすべては偶像となり、人間を滅びへと向かわせるのである。こうして自らの心を満たすために真実でないものを第一のものとして求めていることが「[自立を]始められない」という現代の「行き詰まり」として若者たちの心の内に顕在化しているのではないだろうか。

こうした人間が生きていく上で必要なエネルギーの供給、すなわち愛の供給において「満たされぬ部分」を補なう役割は本来、宗教が担うべき領域であった。人は一人では生きていくことはできないが、心身ともに寄り添って生きることと同時に、「神に愛されている」と信じ、「神に心を寄せる」ことで与えられるまことの平安があるのである。特に、人間の力を超える自然災害や病や死といった問題が立ちはだかり、心の平安を欠いたときに、古今東西、人は神に救いを求めてきた。近代日本人が非合理的と捨て去った種々の信仰が実は人々の喜びの源泉であり、幸福の源であったのではないだろうか。とりわけ「神に愛されている」との確信に生きているキリスト者にとって、ウェスレーが見出した聖霊によって心に届けられる神の愛は『代用品』ではなく、真実の愛である。この真実の愛に生きるものは、どのような「災害」や「死」を含む苦難をも誇りとし、主にある幸いを生きることが可能とされるのである。

注

(1) マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、一九八九年、三六五頁。
(2) 上田光正『日本の伝道を考える①日本人の宗教性とキリスト教』教文館、二〇一五年、二八頁。
(3) マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』二五七頁。
(4) ウェスレー『標準ウェスレイ日記Ⅰ第一巻』山口徳夫訳、イムマヌエル綜合伝道団、一九八四年、七頁。
(5) 前掲書、六四頁。
(6) 前掲書、七四―七六頁。
(7) 前掲書、七四頁。
(8) 藤本満『ウェスレーの神学』福音書文書刊行会、一九九〇年、三四―三七頁を参照。
(9) ウェスレー『標準ウェスレイ日記Ⅰ第一巻』山口徳夫訳、二一〇―二一二頁。
(10) 前掲書、二一〇―二一二頁。
(11) 前掲書、二四一頁。
(12) 前掲書、一八四頁。
(13) 前掲書、二〇五―二〇八頁。
(14) ウェスレー説教「神の国への道」ウェスレー説教集への序文『ジョン・ウェスレー説教五三（上）』竿代忠一・勝間田充夫・藤本満訳、イムマヌエル綜合伝道団、一九九五年、一八四―一八五頁。
(15) ウェスレー「説教集への序文」前掲書、二九頁。
(16) ウェスレー『標準ウェスレイ日記Ⅲ（第五巻）』山口徳夫訳、イムマヌエル綜合伝道団、一九八四年、九五頁。
(17) ウェスレー『標準ウェスレイ日記Ⅰ第一巻』山口徳夫訳、二二八―二三〇頁。、
(18) 前掲書、二四三頁―二四四。
(19) ウェスレー『ウェスレイ日記Ⅰ第一巻』山口徳夫訳、二四四頁。
(20) ウェスレー説教「恵みの手段」『ジョン・ウェスレー説教五三（上）』四〇六頁。
(21) ウェスレー説教「主の山上の説教Ⅳ」『ジョン・ウェスレー説教五三（中）』（竿代信和・河村従彦・藤本満訳）、イム

マヌエル綜合伝道団、一九九六年、一八八頁。
(22) 藤本満『ウェスレーの神学』三九六頁。
(23) 野呂芳男『ジョン・ウェスレー』松鶴亭、二〇〇五年　四四―四五頁。
(24) ウェスレー説教「主の山上の説教Ⅳ」『ジョン・ウェスレー説教五三（中）』一八七頁。
(25) ウェスレー説教「主の山上の説教Ⅳ」前掲書、一八九頁。
(26) ウェスレー『標準ウェスレイ日記Ⅰ第二巻』山口徳夫訳、三四〇―三四〇頁。
(27) ウェスレー『標準ウェスレイ日記Ⅱ（第五巻）』山口徳夫訳、イムマヌエル綜合伝道団、一九八四年、二三―二四頁。
(28) 野呂芳男『ジョン・ウェスレー』松鶴亭、二〇〇五年　六四頁。
(29) ウェスレー『標準ウェスレイ日記Ⅰ第二巻』、三四七―三四八頁。
(30) リチャード・B・シュウォーツ『一八世紀ロンドンの日常生活』研究者出版、一九九〇年、七四―七五頁。
(31) ウェスレー『標準ウェスレイ日記Ⅲ（第六巻）』山口徳夫訳、一四三頁。
(32) ウェスレー『標準説教Ⅰ富と家庭』竿代忠一他訳、日本ウェスレー出版協会、一九七三年、二八頁。
(33) ウェスレー説教「富について」前掲書、八九―九五頁を参照。
(34) ウェスレー説教「金銭の危険」前掲書、一六二頁。
(35) ウェスレー説教「金銭の用法」前掲書、一一〇―一三〇頁を参照。
(36) ウェスレー説教「富について」前掲書、八八頁。
(37) ウェスレー説教「富について」前掲書、九三頁。
(38) ウェスレー『ジョン・ウェスレー著作集Ⅱ新約聖書注解下』心境出版社、一九七九年、二五頁。
(39) 宮崎駿『折り返し点一九九七～二〇〇八』岩波書店、二〇〇八年、一七五―一七九頁。
(40) 佐々木正美『続 子どもへのまなざし』福音館書店、二〇〇一年、一七八頁。
(41) 肥後功一『育ちあうことの心理臨床』同成社、二〇一一年、五一頁。
(42) 宮崎駿『出発点一九七九～一九九六』徳間書店、一九九六年、四四頁。